

阿弥陀堂修復情報

彩色工事

・彩色修復が終了しました 2020. 11.1

今回の彩色修復工事では、蓄積した塵埃を除去、剥落・退色等している箇所を補修し、彩色を美しく保つために、洗浄作業・剥落止め作業・補彩作業が行われました。

洗浄作業は、塵埃や香煙、煤の汚れを落とす作業です。専用の装置を用いて生成した超微細な泡を含んだ特殊な水がわずかな凹凸にも入り込み汚れを吸着するため、強く擦る必要がなく、着色面に負担をかけずに汚れを落とすことが可能となります。



▲洗浄作業の様子



▲剥落止め作業の様子

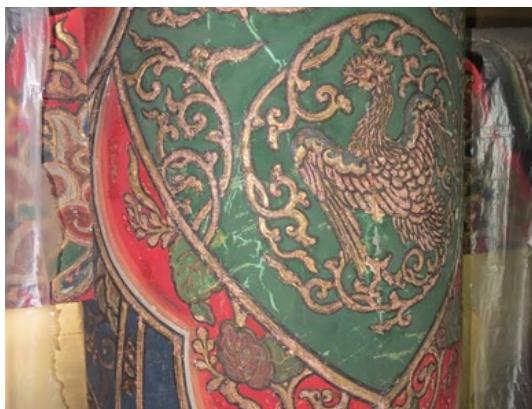
剥落止め作業は、絵具の接着力が低下している箇所を膠水を使用して接着する作業です。通常、絵具を圧着させるために吸収紙を介して指で剥落部分を押しえますが、阿弥陀堂彩色の一部では、より強固に接着するために、テフロン加工紙を介して熱を利用したコテを用いて接着する作業も行われました。

※膠水: 膠を水で溶かし、顔料を絵具にするための接着剤として使用します。

補彩作業は、劣化により退色や損傷した箇所の色面を補う作業です。本修復では、修復箇所に合う色を様々な材料を用いてその場で調合する方法が使われました。また、補修箇所が目立たないように周囲の地色に合わせて補修紙の部分だけを彩色する手法も用いられています。



▲補彩作業の様子



▲修復前の柱



▲修復後の柱

阿弥陀堂内陣 彩色工事の材料たち

阿弥陀堂内陣の彫刻彩色で使用されている顔料・染料^{*}は貝殻や鉱物、植物からできており、色の種類は大きく分けて白・赤・青・緑・黄です。鉱物から作られる絵具は粒子の大きさによって色合いが異なり、粗くなるほど色が濃くなり、細くなるほど色が淡くなります。天然の鉱物、植物を用いるため、独特の深みのある色が特徴です。

今回の修復では、古くから日本画で用いられてきた顔料・染料と膠を混ぜる彩色技法が用いられています。

※着色に用いる粉末で水や油に不溶なものを「顔料」、着色に用いる粉末で水や油に溶けるものは「染料」と呼ばれています。



膠 ^{にかわ} 牛のコラーゲンを濃縮し、固めて乾燥させたものです。水と混ぜ、膠水として絵具を接着するために使用します。焚き方・使い方によって色が異なり、色が薄いほど接着力が強くなります。



胡粉 ^{こふん} 貝殻を砕いてできた白色顔料です。発色を良くするためや盛り上げるための下地、仕上げ用など様々な用途で使用します。本修復では牡蠣の貝殻が使用されています。

辰砂 ^{しんしゃ} 黄色を帯びた鮮やかな赤色(朱色)をしています。硫化水銀からなる鉱物で、古くから赤色顔料として用いられてきました。光に当たると黒っぽく変色します。

賢者の石という別名があります。



藍銅鈹 ^{らんどうご} 紫みがかった深い青色(群青)をしています。高価な鉱物を砕いて作られているため、宝石に匹敵するほど貴重な「青」です。英語名はアズライトで、瑠璃色をさすラピスラズリとは別物になります。



臙脂綿 ^{えんじわた} 黒みをおびた深く艶やかな紅色

(臙脂色)をしており、亜熱帯に生息する虫の分泌物を精製して作られます。使用する際は膠を使用せず、水やアルコールに溶かして使用します。



代赭石 ^{たいしやくせき} 褐色を帯びた黄色または赤色(代赭色)をしており、黄土を高温で燃やして水分を取り去ったもの、または赤鉄鈹を粉砕したものです。「赭」は赤土を意味します。

藍 ^{あい} 暗い青色(藍色)をしています。本願寺では水干絵具の藍を使用し、膠水を加えて使います。藍銅鈹は採集が困難なので藍だけを使用することもあります。

※水干絵具:天然の土、または胡粉や白土に染料を染め付けた微粒子の日本画絵具です。



石黄 ^{せきおう} 明るく鮮やかな黄色(雄黄)で、硫化砒素からなる鉱物です。中世頃までは黄色顔料として広く利用されていましたが、毒性があり、現代ではその供給には限りがあります。



孔雀石 ^{くじゃくいし} 明るく鈍い青緑色(緑青)です。

藍銅鈹に水分が加わり、炭酸が抜けることで孔雀石になります。日本画では緑色を表すのに欠かせない顔料です。



藤黄 ^{とうおう} 少し鮮やかな黄色(藤黄)で、木に吊りし、樹脂を竹筒等で棒状に集めます。下地や混色に使用します。

